



17 御嶽神社

整備によって、「裏宿」と呼ばれるようになったのであろう。この地は湧水や池が多く、湧出した三本の小川は合流して南大沢川を形成している。南大沢川は、明治五年（一八七二）から編さんが始まった『皇国地誌』稿本に「堀川」と記載され、下流の出口付近で大沢川と合流して「城の腰川」と呼ばれたらしい。『新編武蔵』の横川村の項に「城之越川」とあるのがこの川である。

裏宿には、湧水や池とともに古くからいくつかの社寺が存在し、一種の宗教的空間を形成していたとみられる。裏宿の丘陵中腹には、平安時代の十一世紀から十二世紀に寺堂が存在していたことが、発掘調査で確認されている（遺跡B-8「裏宿遺跡群」）。さらに裏宿には、三つの小川が合流する地点を見下ろす位置に御嶽神社が鎮座している（写真17）。伝承によればこの神社は、滝山城下にあった御嶽神社を、城の移転に伴ってその地に勧請したものであるという。滝山の御嶽神社はかつて滝山城本丸の位置にあり、氏照によって城下に近い現在地（丹木町二丁目）に移され、滝山城の守護のための神社とされたと伝えられている。氏照は八王子城の築城とともに、その守護神を新しい城下の清浄な地を選んで祀ったとも考えられる。ただ、この御嶽神社が滝山から移されたという確証はなく、むしろ祀られている場所からは、水源の神である「水分神」（水の分配をつかさどる神）の性格をもち、豊作を祈願する神として八王子築城以前からこの地の人々に信仰されていた可能性も否定できない。

御嶽神社の奥には、西念寺が^{さいねん}あった。西念寺は法蓮寺（市内川口町）末の時宗寺院で、第二代遊行上人他阿真教の開創と伝える。時宗の寺院は道場と呼ばれているが、西念寺門前の小字を「道場根」という。また、時宗は市場との関係が深いとされ、時宗の中心寺院の一つ無量光寺が所在する相模国当麻郡金川郡相模原市は宿駅としても著名であった。室町・戦国期には問屋商人関山氏の活動が知られ、無量光寺付近には市場・上宿・下宿という地名も残っている。また、青梅市七日市場交差点の近くにも、時宗の今井山正福寺が所在し、市場と時宗寺院の関係をうかがわせる。これらの類例から、南大沢川沿いの街道には中世に建てられた宗教施設を伴う宿の存在を想定することができる。また御嶽神社下の池の下遺跡からは、十六世紀後半の船載の染付片や灯明皿として使用されたかわらけ、すり鉢などが出土している。これらの遺物は八王子城が機能していた時期のものであり、この地が八王子城下でも特殊な空間であったことを示している。

滝山城下にあった大善寺・極楽寺も、裏宿の東、峰が谷戸に移転している。『新編武蔵』は大善寺について、氏照の居城が滝山城から八王子城に移転したとき、元八王子慈根寺に移り、その由緒で「御朱印寺領十石ノ地ハ元八王子村ノ内峰ヶ谷戸」にあると記している。極楽寺についても「寺地ノ遷移ハ大善寺ト同ジ」としている。また『名勝図会』は、大善寺に宛てた天正十九年（一五九二）十二月付の徳川家朱印状に「慈根寺村において拾石の事」という文言があると記述している。極楽寺の朱印状も同文と記されており、両寺が八王子落城後も、しばらくは元八王子に存在していたことがわかる。近世になって八王子の市街地に再移転してからも、両寺はこの地を寺領としており、旧在地が朱印地として認められていたのであろう。

鎌倉時代の徳治二年（一三〇七）二月、新義真言宗の学僧即田と儀海は「武蔵国由井横河郷慈根寺」において聖教を書写している（聖教17・18）。鎌倉時代、この地は、河口（市内川口町・上川町）と並んで真言教学の中心であり「由井内横河郷」とも呼ばれていた（編年58）。横河は、今日では市内横川町に地名をとどめているが、中世の横河郷は元八王子町も含まれていたのである。天正十六年（一五八八）五月二十八日、日光山鹿沼（栃木県鹿沼市）の牢人横手右近正の娘が八幡神社に奉



18 元八王子町1丁目「出口」付近

納した鰐口にも「由井領横川八幡宮」と記されている(編年102)。横河に八王子城下の三宿がつくられたため、宿の置かれた地区が横河から分けられ、八王子城落城後、宿が移転したのちに「元八王子」と呼ばれるようになったと考えられる。このように城下の三宿が開かれる以前から、裏宿は宿的な景観を維持し、横河郷の一つの中心だった可能性があらう。こうした状況を前提に、氏照は城下町を計画していった。氏照による宿の開設が、城山川と南大沢川によって南北を区画された狭い带状の台地の上に、新道の開削を伴って整備された可能性を指摘しておきたい。

三宿の 防御施設

三宿の出入口は、元八王子町二丁目の「出口」である(写真18)。こは元八王子町と式分方町を隔てる元八王子丘陵の突端に位置し、先端部には七面大明神が祀られている。そして、その西方には、砦状の防御施設が確認できる。丘陵先端に近い最高所を削平して曲輪を設け、曲輪の周囲は掻き下ろしによって急峻な斜面をつくりだしている。また曲輪のある丘陵の北麓には湧水がみられ、そこに向かう通路も確認できる。守備兵の水場として利用されていたことだろう。また、この砦状遺構の北側、式分方町の小字を「城の腰」または「城下」といい、前述のとおり、南大沢川が合流した大沢川は「城の腰川」とも呼ばれている。「城の腰」は、城山の裾を示す地名として一般的にみられるものであるから、ここには城下三宿への出入口を監視するための八王子城の山城が存在していたとみてよいだろう。城山川と元八王子丘陵はこの付近で最も接近し、その幅は七〇メートルに過ぎない。八王子城からの街道は、この八幡宿東端の丘陵と川によって狭められた空間を鉤の手状に屈曲して四谷方向に向かっていた。鉤の手状の屈曲は、宿の出入口に



19 昭和16年(1941)頃の元八王子町2丁目付近 石神坂でクランク状に曲がる道

よくみられる「杵形」と呼ばれる防御のための工夫であり、ここが八王子城下の「出口」であることを示している。木戸を設けていた可能性も十分考えられる。ここを八王子城下の東端と考えたい。八王子城攻めについて『名勝図会』は軍記を引用し、攻め寄せた軍勢は「丑の刻横山に至り黎明に八王子町構への城戸を破って城下に乱入したが、「城迄は遙かに遠」かったと記している。この「城戸」が、八王子城根小屋地区「内宿」の木戸であったとしたら、城まで「遙か」というほどではない。したがって、この城戸は城下町の東端に設けられた出口の木戸と考えられる。また、三宿のほぼ中央に位置する石神坂は、現状では緩やかに傾斜する坂道であるが、聞き取りによれば、かつては上下二段に分かれた段丘上の地形で、街道は段差を巻くようにして越えていたという。戦前に撮影された航空写真にも、ここで街道がクランク状に屈曲している様子が確認できる(写真19)。八王子城防御のため、あえて段差を残していたとすれば、ここにも木戸が設けられていたことであらう。

三宿については、城の存続期間が短かったため、八日市宿・横山宿・八幡宿がどの程度まで整備されていたのかは不明である。滝山城下から町屋や寺院を移転させたであらうから、ある程度の城下町の形成は進んでいたと思われるが、その実態は史料がなく確認できない。滝山城下の三宿が約一・三キロの範囲だったのに対して、八王子城下の宿は約二キロに及び、城下の規模も氏照の権力と勢力の拡大に比例して大き